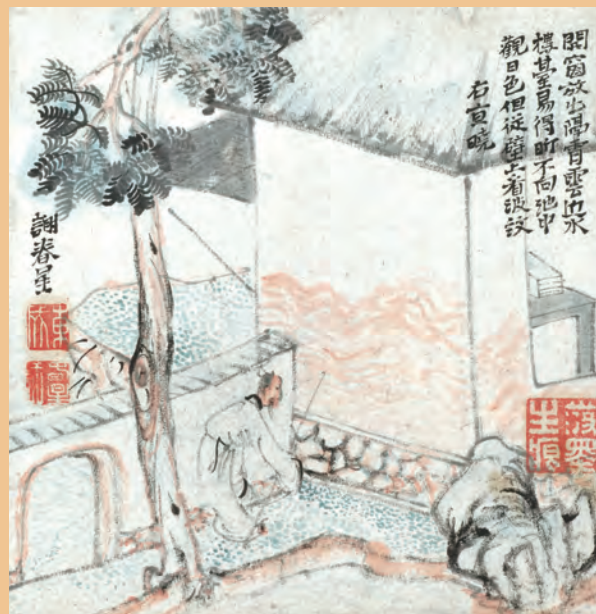




国宝 池大雅《十便図》より「釣便」

【上図展示期間】2019年5月2日(木)～5月6日(月)



国宝 与謝蕪村《十宜図》より「宜暁」

【上図展示期間】2019年4月27日(土)～5月1日(水)

明和8年(1771)

公益財団法人川端康成記念会蔵

※国宝 池大雅《十便図》・与謝蕪村《十宜図》は会期中に画面替をおこないます。

中国の李漁(1611～80頃)が詠んだ「伊園十便十二宜詩」を「十便図」と「十宜図」に絵画化した作品です。李漁は字を笠翁といい、明末清書に活躍した劇作家で出版などもおこない、文人とも評されます。「伊園十便十二宜詩」は自らの別荘である伊園での隠遁生活の不便さを唱える訪問客に、巷間での生活よりも便宜の良いことを述べた詩です。

絵画化したのは、「十便図」が池大雅(1723～76)、「十宜図」が与謝蕪村(1716～83)で、尾張国鳴海の素封家の求めに応じて描かれました。蕪村は俳諧を学び、南画に優れた作品を残しています。大雅も画家として南画をよくし、旅を重ねながら詩画の交遊を広げました。両者とも18世紀京都画壇の巨匠と称せられています。(特別展「川端康成と東山魁夷 美と文学の森」で展示)

「『十便十宜』の画帖で、大雅の『十便』は笠翁の隠棲の暮らしのおもしろさをおもに描き、蕪村はその自然、朝晩の景色の移りのおもしろさをおもに描いたのだが、大雅が自由な構図と柔軟な筆致で、ほぼおなじような色調に楽しく描いて、小さい画面に大きいひろがりを見せてゐるのにくらべると、蕪村はいろいろと苦心をし、変化を求めてみて、たとへば墨絵もまじへてゐる。」

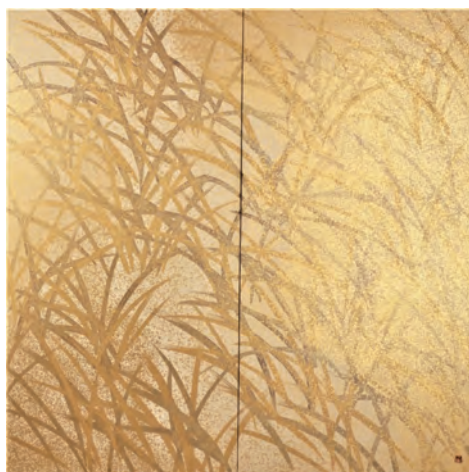
特別展

川端康成と東山魁夷

美と文学の森

2019.4.5(金)~5.26(日)

川端康成（1899～1972）は、日本ではじめてノーベル文学賞を受賞した小説家として知られています。今年に入って、スウェーデン・アカデミーが川端のノーベル文学賞の選考経過に関する資料を公開したことから、再び新聞紙上を賑わせたことは記憶に新しいところです。川端の受賞は、アジアにおいても1913年に受賞したインドのラビンドラナート・タゴールに続く二人目という快挙でした。



川端康成(書)・東山魁夷(画)《秋の野に》 ※1

1968年（昭和43）10月17日、ノーベル文学賞受賞の一報が入ると、東山魁夷（1908～1999）はお祝いのために川端邸へ駆けつけました。その夜、川端は「秋の野に鈴鳴らし行く人見えず」と書をあらわし、後日、もう一

書とともに東山へ贈りました。「野」と「鈴」で「ノー」「ベル」という言葉遊びになっています。東山は、二書を二曲屏風に仕立てて裏面には秋の野を描きました。二人の親交は川端が没するまで続いています。

本年は、川端康成の生誕120年を迎えます。これを記念して、川端康成と東山魁夷、二人の豊潤なコレクションを一堂に会して展覧会を開催いたします。

展示は大きく三章に構成されます。第一章では、縄文時代や中国・周時代の作品から現代の人間国宝の作品にいたるまでの川端と東山が蒐集した作品群をご覧ください。

のちに国宝に指定された絵画や、まだ駆け出しの頃であった草間弥生の作品が含まれているように、川端は独自の審美眼で、幅広い時代の美術品を蒐集しました。それらは彼自身の作品にしばしば登場しています。美術品は川端の単なるコレクションにとどまらず、小説家としての幅広さと奥行を広げる原資であったともいえるでしょう。

一方で、東山も川端と同様に古今東西の美術品を蒐集しています。そして、両コレクションをみていくと、不思議と通じ合うものがみえてきます。文学と絵画という異なる分野で活躍した川端康成と東山魁夷、二人の巨匠の共鳴しあう美の世界をお楽しみいただけます。



国宝 浦上玉堂《凍雲飾雪図》 ※1
【展示期間】4月23日(火)～5月6日(月)

★上記期間以外は複製を展示



エミール・ガレ《茶入》 ※2



石濤《清湘老人山水画冊》 ※2
★会期中に画面替をおこないます。

第二章では、川端康成と美術家たちとの交友を紹介します。川端は、美術家たちとの交流を通じて自身の作品の挿絵や装丁を彼らに依頼しています。東山魁夷との親交のはじまりも川端作品の装丁を東山が手掛けたことにありました。そのような挿絵や装丁は、見事に川端文学の世界観を表現しています。



安田鞆彦《『川端康成全集』表紙画画帖》 ※1
★会期中に画面替をおこないます。

また、本章では、東山自らの作品も存分にご覧いただきます。東山は1968年（昭和43）、



東山魁夷《北山初雪》 ※1

「京洛四季」展で連作17点とスケッチ36点を発表しました。かねてより、川端は東山へ、失われつつある古きよき京都を描くことを勧めていました。東山は翌年刊行された画集「京洛四季」の序文を川端に求め、川端は「都のすがた—とどめおかまし」との長文を寄せています。

「北山初雪」は「京洛四季」の一作です。ノーベル文学賞の受賞祝いに川端へ贈られました。手入れされ整然とそびえる杉の山並みに淡く積もった雪の様子は川端の小説「古都」に描かれた北山杉の風景とも重なります。

第三章では文豪川端康成に迫ります。

川端は、菊池寛に師事し、横光利一ら文豪たちと広く交友しながら自らの作品を磨いていきました。彼らとやり取りをする中で、多くの手紙や書蹟が残されています。また、近年、新たにそうした手紙などが発見されました。川端が購入した夏目漱石や芥川龍之介などの手紙や書蹟も含まれています。

そして、川端作品を考える上で彼の初恋を見逃すことはできないでしょう。岐阜を舞台に繰り広げられた彼の初恋は、生涯、川端作品の底流となっていき、代表作「伊豆の踊り子」にも影響しているといわれています。2014年（平成26）に発見された伊藤初代との手紙のやり取りは、彼の初々しい恋心を伝えてくれます。

川端コレクション、東山コレクションを振り返りながら、文豪川端康成の足跡をたどることで、巨匠の愛した美の世界、そして深遠なる文学の世界をご堪能いただきます。



伊藤初代からの書簡 ※1

※1 公益財団法人川端康成記念会蔵
※2 東山家蔵

歴博セレクション

鵜 飼

—描かれた漁獵—

2019.6.8(土)~7.15(月)祝

岐阜市の夏の風物詩ともいえる長良川鵜飼。篝火に照らされながら鵜匠と鵜が一体となって漁を行う姿は幻想的でもあります。鵜飼は5月11日から10月15日の間、中秋の名月と増水や荒天で川に出られない日以外は毎日行っています。

鵜飼を題材にした絵画は多く、岐阜市歴史博物館でもこれまで収集を行ってきました。

江戸時代に描かれた『鵜飼遊楽図』は、六曲一双の屏風に春と秋、二つの季節で鵜飼を楽しむ人々の様子が描かれています。篝火を焚いた鵜舟を囲うように観覧船が集まり、弁当箱や酒、茶を用意して鵜飼を観覧していました。現在のように決まった時間・場所で鵜飼観覧をしていたのではなく、漁をしているところをそれぞれが見て楽しむというスタイルでした。

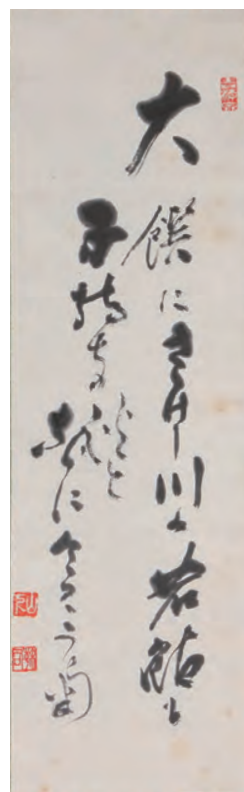
その一方で藩主が見る上覧鵜飼が行われていました。『長良川上覧鵜飼図』は1843（天保14）年に尾張藩12代藩主・徳川斉荘が岐阜を訪れた際に行われた上覧鵜飼を描いています。上覧を行った斉荘は「岐阜の道しるべ」の中に鵜飼の様子や河原で焼いた鮎を食べ、その味の良さをほめる記述も残されています。



狩野晴真「長良川上覧鵜飼図」



今回は博物館が収集してきた絵画だけでなく、鵜匠家所蔵の絵画や墨跡もご紹介します。鵜飼を通して交流を得た文人たちから鵜匠へ贈られたものや、鵜匠家が収集した作品、更には鵜匠本人が書いた作品など、鵜飼に関わる豊かな文化の一面をご紹介します。



山下幹司「大饌にささげし」※1



鵜飼遊楽図（左隻・右隻）

※1個人 蔵

加藤栄三・東一記念美術館

日展出品作と下絵

2019.1.5(土)~4.29(月)(祝)

私たちが、美術館や画廊で鑑賞する作品は、そのほとんどが本画（完成作品）ですが、一つの作品が完成するまでには、現場での取材とスケッチ、試行錯誤を繰り返しながら作り上げた下絵といった作家が追求し、勉強した後を知ることのできる数多くの表に出ない作品が存在します。

日本画の絵具はチューブから絞り出して使う水彩や油彩のような絵具ではなく、鉱物、植物、動物といった自然の中にある材料から抽出した絵具を、膠という接着剤と混ぜ合わせて画面に定着させるため、取材現場での制作には向いていません。そのため、現場で体験したことや題材を細かく観察して描いたスケッチ等をもとにアトリエで構想を重ね、下絵を作り、下絵をもとに本画（完成作品）を描いていくという制作過程をたどります。



加藤栄三「雷神(大下絵)」

当館は、ご遺族より多くの素描・下絵をご寄贈いただいたことで、本画が完成するまでの制作過程を系統的に知ることができる資料を多く所蔵することが出来ました。

今回は、本画とともに小下絵、大下絵を同時に展示し、制作過程を比較しながら鑑賞していただける企画展としました。



加藤東一「風神」

加藤栄三は風景画や動植物画を主体に制作を続けてきましたが第8回新日展へ出品した「雷神」で、はじめて日本の古典美術に題材を求めました。栄三は宗達の風神雷神図屏風を見た時の感激と嬉しさが忘れられず、生涯のうちに風神雷神を描く事を目標としていました。

「東京オリンピックが開催された年、国立博物館では日本の古美術展が開かれ、勇気をもって秋の制作には雷神を描こうと決意した。(中略)制作にあたり、この限られた空間の中に宇宙の無限の広がりや深さを求め雷神を無重力の状態にして表現し、空間の中から前方に迫ってくる構図を選んだ。」

栄三は「雷神」を出品した後「風神」を描くことなく1972年(昭和47)ご逝去されました。

東一は「きっと、兄が生きていれば風神も描いたであろう」と三回忌の年、第7回改組日展に「風神」を描き発表しました。

本展での栄三作「雷神」は大下絵ではありますが、久しぶりに揃った栄三・東一両画伯の競作である風神雷神の名作をご鑑賞ください。

加藤栄三・東一記念美術館

所蔵作品展

～新収蔵作品から～

2019.5.1(水)～7.7(日)

「私にとっては、一つの転機になった絵です。この年の5月に兄（栄三）は亡くなりました。その前に私は、偶然にも死というものを考え出していました。絵の中の人物は、自分自身であり、自画像です。」

改組第4回日展に出品された「蒼」について東一の制作意図を語ったものです。



加藤東一「蒼」

昨年、ご遺族より加藤東一の代表作「蒼」「離」「風神」の3点が当館に寄贈されました。

「蒼」の着想は師：山口蓬春の死に直面して感じた、生きることの刹那さやはかなさ。

“いのち”もしくは“生命”そして“死”というものがテーマです。

偶然にもこの作品の制作中に兄：栄三の訃報が届いたことで東一は生死をより身近に感じ、この作品の後、兄：栄三を弔うために描いた「離」「ある行進」「風神」を日展に続けて発表していきます。

改組第5回日展に発表された「離」は午年である栄三自身が昇天していく姿を描いたもので、これら3作品を鑑賞しに来館された栄三

の高弟であるK氏が思わず漏らした言葉が「久しぶりに見たけど、横たわる人物の顔が栄三先生にそっくりだ。これが（日展に）出てきたとき、弔いをテーマにした作品はいい加減にやめないかと非難する人もいた。」

この後も弔いシリーズは続き、岐阜県美術館が所蔵する「ある行進」（改組第6回日展出品作）、兄：栄三の三回忌に合わせ制作された「風神」（改組第7回日展出品作）は日本画家：加藤東一の中ではきわめて重要な位置を示す作品となり、4部作品全て岐阜に揃ったことに対して、ご遺族ならびに作品を長く保管して下さいました関係者の方々に改めて感謝を申し上げます



加藤栄三「早蕨庵の夜」

1946（昭和21）年7月9日の岐阜大空襲で生家とともに加藤栄三の代表的な作品は焼失しましたが、今回、岐阜市岩戸「蕨（わらび）庵」を仮住まいにしていたころに描いた一連の素描11作品が見つかり、本年度、これら新たに見つかった加藤栄三・東一両画伯の貴重な素描を所蔵することが出来ました。

素描作品は画帖〈現在のスケッチブック〉を切断したもので、作品の中に蕨（わらび）庵近くに住んでいた加藤栄三の門下生や支援者も描かれており、昭和21年から昭和23年頃までの栄三の動向を知る上で大変貴重な作品です。

本展覧会ではこれまで所蔵してきた人気の高い作品と初公開の作品をあわせて栄三・東一両画伯の新たな魅力を探っていきます。

博物館ニュース

岐阜市歴史博物館分室原三溪記念室

子ども向けワークシート『三溪すごろく』作成しました!

美濃国厚見郡佐波村（現在の岐阜市）出身の原三溪の生誕150年（2018年）を記念して、その生涯と業績を学べるワークシートを作成しました。

三溪は、生糸の輸出業で財を成した経済人であり、同時に古美術の収集や若手芸術家の支援を行い、茶人としても高名だった人物です。

ワークシートは、そんな三溪の人生をテーマとしたすごろくや記念室内の展示をヒントに回答するクイズとなっており、遊びながら三溪の人生・業績と社会の変化を学ぶことができます。



ふるさとで過ごした
幼少期のエピソードも
紹介しています。



ワークシート双六ページ

■分館 加藤栄三・東一記念美術館の展示■

本誌6ページで紹介した以外の分館展覧会は以下の通りです。

- 3月 5日(火)～3月30日(土) 須藤 美保 展 ―きらめく時の中で―
- 4月 2日(火)～4月29日(月・祝) 村上 肥出夫 回顧展
- 5月 1日(水)～7月 7日(日) 岐阜の地ではばたく 翔美会

■特集展示(2階 総合展示内)■

2階の総合展示の一角に特集展示室を設置し、1～2ヵ月ごとにテーマを設けて資料を公開しています。これからの日程は次のとおりです。

12月14日(金)～3月17日(日) 年中行事

■分室 原三溪記念室の展示■

- ～2月28日(木) 林晃三
 - 3月 1日(金)～4月11日(木) 山田省三郎～治水に尽くした三溪の師～
 - 4月12日(金)～5月23日(木) 杏村の花鳥
 - 5月24日(金)～7月 4日(木) 杏村の山水
 - 7月 5日(金)～8月16日(木) 歴博コレクション
- 上記の日程は、都合により変更する場合もございます。ご了承ください。

***** 館 蔵 資 料 紹 介 *****

白衣観音・般若心経印籠

水谷華山 作 近代
高3.5cm
岐阜市円徳寺蔵
岐阜市歴史博物館寄託



竹材の入手が容易な岐阜市周辺では、幕末から明治にかけて多くの竹工芸作家が活躍しました。その代表として辻萬峰や加納鉄哉が知られていますが、異彩を放った水谷華山も注目されます。

華山は慶応3年（1867）、大垣市に生まれ、若いころ巡査を務めていましたが、明治29年（1896）、岐阜市に居を移し、彫刻で身を立てる決断をします。華山作品の最大の特徴は、その細密な彫法です。鉄筆による文字は肉眼で読むことができないほどです。華山は昭和3年（1928）に没しましたが、明治後半から大正期にかけて日本各地で開催された博覧会で多くの賞を受けています。

写真の印籠は実用品としては小ぶりで、華山がその腕を見せつけるためこのサイズで制作したと思われる。表面はやや異形ですが白衣観音でしょう。白衣観音と般若心経を裏表に配した作品を華山はいくつか手掛けているからです。裏面には1mmに満たない経文が整然と刻まれ、華山の真骨頂といえるでしょう。なお、この作品を所蔵する円徳寺は信長の楽市楽座制札で有名ですが、水谷華山とも縁が深く、華山の作品を多数伝えています。華山の還暦を祝って竹印を展示した会場にもなっています。

利用の御案内

- **開館時間** 午前9時～午後5時
(入館は午後4時30分まで)
- **休館日** 毎週月曜日と祝日の翌日、年末年始（12月28日～1月3日）
(月曜日が祝日の場合はその翌日)
- ※特別展・企画展開催中は変更することがありますので、ご注意ください。
- **観覧料** (団体は20人以上)
歴史博物館総合展示、加藤栄三・東一記念美術館
高校生以上 300円 (団体240円)
小中学生 150円 (団体90円)
両館共通で観覧される場合
高校生以上 510円 (団体410円)
小中学生 250円 (団体150円)
- ◎下記の方は無料で観覧いただけますので、①②の方は証明できるものをご提示ください。
①岐阜市在住の70歳以上の人
②身体障害者手帳、精神障害者保健福祉手帳、療育手帳の交付を受けている人、およびその介護の方1人
- ③岐阜市内の小中学生
- ④家庭の日（毎月第3日曜日）に入館する中学生
以下の人と同伴する家族（高校生以上）の方
企画展は、総合展示料金でご覧いただけます。
特別展は、その都度料金を定めます。
- **交通案内** JR 岐阜駅・名鉄岐阜駅から岐阜バスにて長良方面行きに乗り、「岐阜公園歴史博物館前」で下車、すぐ東に歴史博物館があります。
岐阜公園内ロープウェー乗り場すぐ隣に加藤栄三・東一記念美術館があります。

博物館だより No.101 2019. 2

編集・発行 岐阜市歴史博物館

〒500-8003 岐阜市大宮町2-18-1 ☎058(265)0010

(分館) 加藤栄三・東一記念美術館

〒500-8003 岐阜市大宮町1-46 ☎058(264)6410